



第135号

2021年10月15日発行

千葉大学教育学部  
同窓会  
〒263-8522  
千葉市稲毛区弥生町1-33



### コロナ禍の学生たち

教育学部教授・学内理事長 笠井孝久 (H元・3卒)

### コロナ禍の学生生活

昨年からの新型コロナウイルス感染症のまん延により、この一年以上、学生は様々な制約のもとで大学生活を送っている。昨年度は四月から入校規制が実施され、ほとんど全ての授業がオンラインによる実施となった。授業ばかりでなく、サークル活動やアルバイトなども制限、自粛が求められた。

特に、昨年度の入学生は、対面での入学関連行事がほとんど行われず、大学からの連絡ややりとりはメールやチャットといった方法に限られた。授業が始まった後も、授業の進め方やパソコンの操作の仕方に戸惑ったり、教員や同級生がどんな人かも分からなかったりして、不安な日々を過ごしたことが

と思う。  
後期からは、少しずつ対面授業も始まり、今年度からは生活も落ち着いてきたところである。

### 新しい教育課題に向けた取り組み

そのような状況の中でも、学生たちは新しい活動に取り組んでいる。教育学部では平成三十一年度入学生から新しいカリキュラムに移行した。その中で、実践力の向上を目指した多様な実習関連科目が開設されている。

三年生の必修科目として設置された「学校インターンシップ基礎実習」では、学校等の教育関係施設で年間百時間程度の実践を行う。本実習のように集中的に実習を行うのではなく、それぞれの実

### 紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
私の趣味アラカルト	8面
教育学部の附属施設紹介	8面
おたより	9面
支部だより	9面
令和3年度経常会計予算	10面
永年勤続表彰者紹介	10面
受賞者からのメッセージ	11面
教育学部創立150周年事業進捗状況	12面
令和3年度の役員の紹介	12面
物故会員	12面
編集後記	12面

習先の活動にに応じて、週一回二～三時間の活動を行ったり、青少年教育施設のイベントに参加し、児童生徒の指導の補助を行ったりする。長期にわたって、また様々な教育実践を観察・参加する経験となっている。

一、二年生に対しては、附属小・中学校での観察、実践する「セレクト実習」が開設された。こちらにも授業の空き時間を使って、半期(約二ヵ月)の間に実習を行う。

先日、セレクト実習を終えた二年生の振り返りの会に参加したが、学生たちは皆、学校現場での経験に刺激を受けていた。それぞれの経験を話し合う場面では、「先生が生徒を指導する場面を見て」自分だったら、あのようには指導できるか、と考えた。「前半は、自分の観察する課題がはっきりしていなかったもので、ぼんやりと参観してしまった。後半は課題を明

確にして観察、参加できた」と活発な意見交換がされていた。この学年は、昨年度ほとんどの授業がオンラインとなり、期待していた学生生活が送れなかったにもかかわらず、参加した学生たちの教職に対する熱意が感じられた。

コロナ禍により、学生たちも様々な制約や我慢を強いられ、教員を目指して熱心に学習に取り組んでいる。様々な場面で同窓生の皆様にもお世話になることと、

が、学生たちを御指導、応援していただければ幸いです。



教員養成開発センターの授業風景

特別寄稿



教科書づくり的魅力に魅せられて

大日本図書株式会社 取締役 柳 澤 千賀子

(S63・3卒 旧姓 森戸)

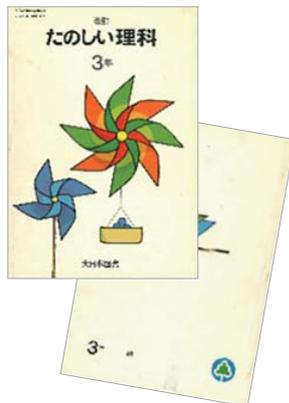
教科書編集の仕事に就いて、三十三年になる。初めて担当した教科書は、新設されたばかりの小学校生活科。その後は算数や中学校数学の教科書に長く関わってきた。

小学校教員養成課程で算数科を選修していた大学四年の夏、企業への就職活動をしてみたいという気持ちで芽生えていた。今のよう「就活」という仕組みはなく、情報も乏しかった時代である。会社ってどんなところ？面接ではどんな人と会って話ができる？それができるのは今だけ。受けてみるだけなら……。

それは好奇心といってもいい感覚だったが、思い立ったらさっそう行動。全く専門外の業種ではなく、教育に関係のある会社なら、面接で少しは受け応えができるかも。そんなことが頭の中をめぐり、「教科書の会社」を受けてみようと思心した。

インターネットはないので、何かを調べるには大学の図書館に行

くしかない。書架から何冊かの教科書を選ぶと、理科の教科書には見覚えがあった。「たのしい理科」という書名、表紙についている木のマークもあの頃とおなじだ。そういえば子供の頃、教科書を見るのは結構好きだったなあ。



当時の教科書

奥付の会社名と電話番号を書き写して持ち帰り、思い切って電話をすると、ちょうど採用の予定があるとのこと。こうして、想像もしていなかった編集者への道を進む決断をすることになる。

\*

教科書編集者としての仕事は多岐にわたり、数年間をかけてひととおりの仕事を経験する。編集会議では著者どうしの議論に圧倒さ

れ、撮影やデザインの場面ではプロの仕事に魅了され、検定に合格してからも、教科書が子供たちの手に渡るまで気を抜けない。毎日が勉強の場であった。一方、新しいものを生み出す仕事であるため、創意工夫も必要である。教科書をもっと魅力あるものにしたという思いで、微力ながら全力で取り組んできた。

教科書は、改訂を重ねるごとに、刷り色がカラーになり、判型が大きくなり、質・量ともに充実させた新しい教科書観のもとでページ数も大幅に増えた。そしていま、デジタル化が目前である。まさに教科書の変遷を目の当たりにしてきたが、いつの時代の教科書も変わることなく、それに関わる多くの人々の熱い思いが込められていて、それを形にすることが教科書編集者の仕事である。教科書を手取る子供たちや先生方の姿を想像しながら、一冊の教科書に約四年の歳月をかける。その一冊が子供たちの手に渡るとき喜びは、なにもものにも代えがたい。

\*

私が入社したころは女性の編集者はわずか数人であったが、現在



多くの女性編集者が活躍している。私も周囲の環境に恵まれたおかげで、これまで仕事を続けることができた。編集長になったとき、さらに責任が重くなったときにも背中を押してくれる人がいて、現在は取締役という立場で業務にあたりついている。これからは社員力を引き出す仕事、教科書の未来のために仕事をしたいと思っ

ている。今回このような機会をいただき、自分のこれまでを振り返ることができたことに感謝したい。そして、この仕事を改めて天職だと思ふことができた。

それぞれの場所で、日々奮闘されている同窓会のみならず、これからの「教科書」を通してつながっていったらともうれしい。私はこの場所で、これからも教科書とともにいたいと思う。

「変身の楽じゃ」



岡村 太郎 (S47・3卒 千葉市)

子供の頃から映画が好きで、これまで数え切れないほどの映画を観てきたが、定年退職後、その趣味が高じて「エキストラ」に嵌ってしまった。週一〜二度ロケ現場に呼ばれ撮影に参加している。

これまで延べ二百五十本以上の作品に関わってきたが、現場は過酷である。労基法など全く関係がない。

原則、エキストラは目立ってはいけない。あくまでも動く背景で

私の趣味



これもある意味「熱中症」



丸尾 剛彦 (S59・3卒 山武地方)

現在進行中の趣味は「草刈り」である。「どこが趣味だ？」と思われられるかもしれないが、周りにやめろと言われてもやめず、時間と費用をかけるのを厭わず、一つのことを追究し続けるという点では、実益を兼ねた立派な趣味とい

ある。しかし、自分ではない何かに変身して、作品作りに参加できる喜びが得られる。

また、現職時代は教職という狭い世界で生きてきた私にとって、様々な世界で生きてきた仲間との交流は、大いなる楽しみでもある。エキストラには定年がない。必要とされる限りは続けるつもりである。



映画「峠 最後のサムライ」から

えると思う。

最近「スポーツ草刈り」というジャンルを作れないかとも妄想している。種目(課題)として考えているのが「一定の面積の平坦な土地を刈り、時間と美しさを競う」「起伏のある土地を刈る」「そちこちに隠れている花の株を避けて刈る(株を損ねたら減点)」等々。種目のネーミングを考えながら、風呂あがりのビールを楽しみに、今日も草刈りに勤しんでいる。

(9) 2021年10月15日



石川県でも頑張っています



勘田 洋平 (H16・3卒 白山市)

勘田 洋平

私の勤務している白山市は、石川県の中心より南に位置し、山から海まである自然に恵まれたところである。降雪地域であり、近年は年に数度まとまった降雪に見舞われ、平地でも八十cm積もり、一時交通機関がストップすることもあった。しかし、総合的に住みやすい地域であり、今年の「全国住みよさランキング」でも全国総合六位となっている。

教育にも力を入れている地域で、私の勤務校である白山市立松任中学校は全校生徒八百人余りの県内では大規模校だ。普通教室だけで二十五クラスある。八年前から、その普通教室だけでなく特別教室にも冷暖房が完備され、さらに、三年前には屋内プールが温水化され、子供たちが充実した設備で学べる環境が整っている。以前に勤務していた学校は、各教室に

扇風機が三台あるだけということに比べたら、非常に快適な環境だと言える。

私は本校に赴任して四年目になり、今年度は三年生の担任と進路指導を任されている。本県では、高校進学に対してずっと国公立志向が高かったが、昨年度から始まった私立高校授業料実質無償化により、私立高校への進学者が大きく増えた。そのため、今年度もそのような流れが続くであろうと考えられる。長年続いていることでも、制度が変われば志望も変わってくるので、常に新しい情報を取り入れ、学び続ける必要があると感じる。

また、近年は個性の尊重を受け入れるあまり、集団としてのまとめ方が非常に難しいと感じることが多い。集団での指導だけでなく、子供一人一人に伝わるような個別の働きかけをしている。常に神経をすり減らしながら指導を行っているが、その分卒業を迎えるときには、子供の三年間の成長を実感し、感慨深くなることが多い。今年度も三年間持ち上がりで担当している生徒なので、責任は重いですが、三月までに見せる大きな成長に期待したい。